



やきものの分類の話 (後編)



李朝白磁（左）と唐津焼（右）

前号では、やきものの分類は、江戸時代以前には「土器」と「陶器」の2分割でしたが、明治時代に欧州由来の区分と合体し、「土器」「陶器」「^{せっき}磁器」「磁器」の4分割に変化したことをお話しました。ちなみに、「Stoneware」を直訳した「^{せっき}磁器」は、当初は「石器」の文字が当てられましたが、原始時代の石製の道具との区別が付かないことから、後に火偏を加えて、「^{せっき}磁器」の和製漢字が当てられました。

こうした4分割の分類は、明治から大正時代に徐々に浸透しましたが、今でも2分割時代の名残を残すものもあります。たとえば、明治29年（1896）に産声を上げ、大正4年（1915）から大々的に開催されている有田の春の大イベントに、陶器市があります。その名から陶器が売られているのかと思いきや、訪れたことのある方なら一目瞭然ですが、ほとんど磁器ばかり。これは、陶器市の成立時期によるものなのです。

ところで、このような^{たいど}胎土の質を重視する欧州の分類が持ち込まれたことで、陶磁史上において、理解することが難しくなったことがあります。その一つが、日本磁器の誕生についてです。皆さんは陶器と磁器の違いをご存じですか？この問いに対しては、ほとんどの場合、「胎土が陶器（^{せっき}磁器）質か磁器質かの違い」という答えが返ってきます。

ところが、たとえば磁器より誕生が遡る唐津焼は、技術の源流となった朝鮮半島・李朝流の区分では、壺・甕などを除けば、陶器ではなく磁器なのです。実は、世界を見渡せば、日本のように陶石だけで磁器を作るところは珍しく、ほとんどは粘土ないしはそれに陶石を加えて原料とします。李朝も同様で、技術は同じでも、近くでカオリン質の粘土が採取できれば、胎土が白く焼き上がって磁器質の磁器となり、それが手に入

らないところでは陶器（^{せっき}磁器）質の磁器になるというわけです。これは、日本磁器の誕生以前に、すでに唐津焼という李朝風磁器が完成していたことを意味し、たとえその技術のままで磁器質のやきものができたとしても、それは日本磁器の完成とは言えないのです。

日本磁器が李朝磁器と大きく異なるのは、磁器質の胎土が必須なことに加え、無文が基本の李朝に対して、当初から染付製品を基本とすることです。これは当時国内の磁器市場をほぼ独占していた中国磁器風を目指したためで、唐津焼の技術をベースに、呉須の用法や土型による成形など、李朝の技術に欠如した部分は中国の技術で補完しました。つまり、日本磁器とは、李朝の技術で製作した中国風磁器のことなのです。もっとも、中国風を目指したとはいえ、陶工が持つのは李朝由来の技術なので、当初は完全に李朝色を隠しきることはできませんでした。例えば、下の3点の磁器皿が並ぶ写真は、まん中が有田磁器、左が李朝、右が中国の磁器です。染付^{けんせん}圈線や見込み蛇ノ目^{ゆうは}釉剥ぎなど、消費者に見える部分は出来るだけ中国風に整えられています。器形や見込みの^{すなめづ}砂目積みなどには李朝風が残っています。（村上）



李朝白磁（左）、有田磁器（中）、中国磁器（右）

皿 季刊 山

No.147

秋
2025

有田町歴史民俗資料館・館報

夏休み子ども向け講座を開催しました

当館では、例年夏休みに子ども向け講座として「歴史の川ざらい～ベンジャラを探そう!」と「有田内山の町屋模型作り教室」を開催しています。その活動内容を紹介します。

第12回「歴史の川ざらい～ベンジャラを探そう!」(7月31日開催)

この講座は、実際に川に入ってより古いほど高得点を得るゲーム形式で、川底に沈む陶片を探してみようという内容です。有田ならではの独特な光景や風情に楽しく触れながら、郷土愛や誇りを持ってもらおうという企画で、今年は8人の子も達が参加してくれました。

今回の採集は、昨年までの有田川の支流白川川ではなく、そこから数十メートル離れた同じ有田川の支流の猿川で実施しました。ここにも白川川同様に川底に沢山の陶片(ベンジャラ)が落ちています。この陶片も、江戸時代以降の登り窯で失敗品として廃棄されたものが川に流れ込んだりしたもので、400年以上も続く窯業の伝統を物語る一端を垣間見ることができました。

子ども達は、まずは当館内において職員による有田焼の歴史や陶片の見分け方のコツ、現地での注意事項など簡単なレクチャーを受け、その後全員マイクロバスに乗り込み川へと出発しました。現地では炎天下にもかかわらず、子ども達は真剣な眼差しで、思い思いの場所へ古い陶片を探しにいました。最終的に、参加者全員が江戸時代の陶片を発見することができ、中には日本で磁器がはじまって間もない1630年代頃のものや、有田が世界の磁器生産の中心地であった17世紀後半の海外輸出向けなど、職員を唖らせるような発見もありました。そして、その後再び当館に戻って今回の成果について発表を行い、みんなで喜びを分かち合いました。

子ども達が発見した陶片は、貴重な文化財であるため法律上持ち帰ることはできませんが、正式な手続きを経て資料館で永久に保管します。なお、有田町が陶器市でにぎわう来年のGW期間中に、旧田代家西洋館に展示コーナーを設けて一般公開する予定ですので、その際にはぜひお越しいただければと思います。



鑑定結果を待つ子ども達

第24回「有田内山の町屋模型作り教室」(8月7日開催)

この講座は、国の重要伝統的建造物群保存地区(以下、伝建地区)に選定されている有田内山の町並みに触れることで、やきものの町の独特な景観や歴史について学び、郷土への理解を深めることを目的として開催しています。講座では、数軒の実在する町屋の模型(約200分の1サイズ)の製作と、町なかで目にする塀や池、庭をはじめ、自分たちが思い描くさまざまな要素を組み合わせ、将来はこんな町にしたいとそれぞれが願う、有田の町並みを作ってもらいました。

今年参加した6名は全員、内山地区が校区の有田小学校の生徒で、日常的に伝建地区に接しています。しかし、まず最初に担当職員の説明を受けながら、模型のモデルとなる実際の町屋を訪れ伝建地区を散策することで、普段は気付くことのない新しい発見や地区が醸し出す独特な空気感を感じ取っていたようです。その後、教室に戻った子どもたちは、現地で見て感じたイメージを膨らませ、さっそく町作りの開始です。

現代っ子の最初の難関は、カッターの使い方に慣れることです。そのため、最初に作る一軒目は、プリントされた町屋の部品を一つずつ台紙から切り離しながら、慎重に組み立てていきました。しかし、コツをつかんだ後は手際よく作れるようになり、2軒、3軒と組み立てていくうちに、あっという間に午前中が終わりました。昼食後、午後からは組み立てたそれぞれの町屋を土台に配置して、町並みの製作です。町なかを走る道路や町屋の中庭の池、景観を彩る草木など、15時を過ぎる頃には独創性にあふれる町並みが、次々に完成していました。

今回の講座を通して、新たに伝建地区や文化財への関心を、そして生まれ育った有田町への愛着を持ち続けてほしいと思います。



豊かに彩られた建物

博物館実習と社会人実習を行いました

博物館において、資料の収集、保存、調査、展示などを行う専門の職員を「博物館学芸員」といい、博物館には必ず学芸員が在籍することが「博物館法」で定められています。この資格は国家資格で、一般的には大学で必要な単位を修得することで手に入れることができますが、その必須科目の一つに、実際の博物館で技術や知識を学ぶ「博物館実習」があります。そのため学生は、実習生を受け入れている博物館に申し込む必要があり、当館でも、例年3月ごろからホームページで募集をかけ、今年度は1名の応募がありました。

さらに今回、町内企業の株式会社香蘭社より、今後資料の管理や展示などを担う若手職員に対して、実習をして欲しいという要望があり、大学生とあわせて、2名の方の社会人実習も行うこととなりました。

3名で始まった実習は8月4日(月)～8日(金)の5日間行いましたが、今回は「出土遺物の整理作業」をテーマに、水洗いや注記、実測作業など、実際に出土遺物の整理作業を体験してもらい、それをテーマに沿った展示にまで仕上げてもらうことを目標としました。展示内容の立案、ポスターデザイン、キャプション作成をはじめ、それぞれが役割を分担しつつも協力して、みごとに展示までこぎ着けることができました。この実習生の成果は、実際に有田焼参考館で展示しています。ぜひご覧ください。

他にも、町内の史跡探訪や、夏休み子供向け講座へのスタッフとしての参加など、これまでにない経験を積むことができたのではと思います。

最後に、実習生よりコメントを頂戴したので、紹介させていただきます。

◎ 実習生のコメント ◎

この度、民俗資料館で文化財の実測、ワークショップ、展示作業を体験し、「後世へ歴史を継承する」という資料館の熱意や保存・継承の真摯な姿勢を強く感じました。中でも実習生が主体となって取り組んだ展示実習では、照明の配置や展示文章の構成に悩みつつ、お客様が見学する目線と学芸員視点の両立の難しさを実感しました。香蘭社も今後、保持している古陶磁や古文書の管理を改めて行う日が来ると考えています。その際に今回得た知識と技術を活かします。(社会人実習生)

8月4日からの5日間受講した博物館実習では、まず旧上有田地区に人が住み始めた由来や磁器生産の話など、染みついていた知識とは違った事実を知りました。出土遺物整理作業では、実測作業をアナログで体験し、お皿をそっくりに書き写すのは忍耐力と体力、そして絵心が必要だと痛感しました。5日目は実習で最も苦戦をした実測についての展示を行い、展示構成の難しさを体験することができました。これからは学んだ知識を活かしていきます。(社会人実習生)

8月4日から5日間の博物館実習を通して、学芸員の仕事を実践的に体験することができました。陶片の水洗いや注記、展示計画など大学の講義では経験することのできない活動は、どれも新鮮でした。また実際に町内の博物館や史跡を巡り、有田特有の文化や歴史を学ぶこともできました。結果としてこれまで何度も訪れてきた有田の新しい景色を知ることができ、この町の魅力をもっと多くの人に知ってほしいと思うようになりました。(博物館実習生)

出土遺物の整理作業
(遺物実測)



子どもに教える実習生
(町屋模型作り教室)



展示作業の様子
(有田焼参考館)



史跡探訪
(唐船城跡)



有田小学校でフィールドワークを行いました

6月30日（月）に、「総合的な学習の時間」の一環として、当館の学芸員が、有田小学校4年生を対象に出張講座を行いました。今回のテーマは「有田町の伝統にふれよう」ということで、特に有田小学校周辺は有田・武雄地区に伝わる「黒髪山の大蛇伝説」の舞台の一つであることから、民俗学的なフィールドワーク（直接現地に赴いて観察や調査を行い、データを収集する手法）に挑戦してみました。

子ども達に古地図を渡し、実際に歩きながら伝説の痕跡や史跡を辿りましたが、毎日通学路として通っている道や川、山の一部が、実は伝説由来の地名だったり、江戸時代は代官所や登り窯があった場所だったということが判明すると、見慣れた景色も少し違って見えたようで、とても驚いていたのが印象的でした。

最後に、子ども達が自分で調べた有田町の伝統について、分からなかったことや詳しく知りたいことを質問するコーナーを設けましたが、有田の偉人やトンバイ堀に関する質問のほかに、「やきものの色は何種類?」「学芸員の先生はなぜ有田の歴史に詳しいの?」という回答に窮する質問も受けつつ、子ども達と楽しい時間を過ごしました。

子ども達から届いた手紙。館内エントランスにて閲覧できます。



有田陶磁美術館 休館日改定のお知らせ

有田陶磁美術館の休館日を下記の通り変更しました。

【改定前】

休館日：月曜日

年末年始（12月29日～翌年の1月3日）



【改定後】

休館日：月曜日（月曜日が祝日の場合は、その翌日）

年末年始（12月29日～翌年の1月3日）

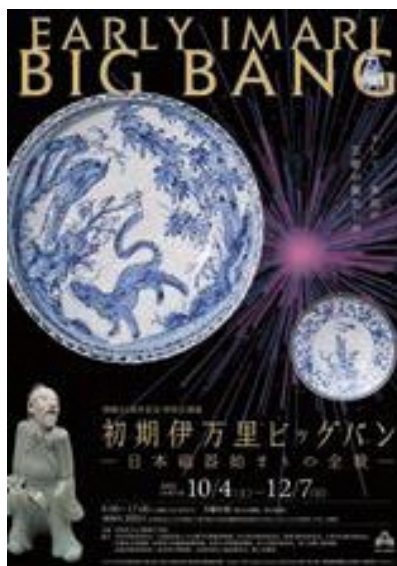
※陶器市期間中（4月29日～5月5日）の月曜日は開館します。

※展示替えや悪天候などのため臨時休館する場合があります。

九州陶磁文化館の特別企画展で 有田町所蔵の出土陶片が展示されます

有田町に所在する佐賀県立九州陶磁文化館で、今秋開館45周年記念の特別企画展「初期伊万里ビッグバンー日本磁器始まりの全貌ー」展が開催されます。肥前地域における初期の磁器生産に焦点をあて、現代人をも魅了する初期伊万里の伝世する優品と、草創期の技術開発の様子をうかがい知ることのできる発掘調査資料などから、これまでの研究成果に基づいて、その起源と発展の真相に迫ろうという展示です。

この特別展には、日本磁器を完成させた窯場の可能性が高い小溝上窯跡や、有田の産業的磁器生産の基盤を築いた天狗谷窯跡をはじめ、有田町が所蔵する初期伊万里の陶片の数々も展示される予定です。ぜひ会場に足を運び、日本磁器の全貌に触れることで、初期伊万里のビッグバンを感じてみてはいかがでしょうか。



場 所：佐賀県立九州陶磁文化館
佐賀県西松浦郡有田町戸約乙 3100-1
会 期：令和7年（2025）
10月4日（土）～12月7日（日）

※ 特別企画展の詳細については、佐賀県立九州陶磁文化館のホームページなどでご確認ください。
URL： <https://saga-museum.jp/ceramic/>
お問合せ： ☎ 0955-43-3681

季 刊 『皿 山』

通巻147号（令和7年9月17日）

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山一丁目4-1

☎ 0955-43-2678 FAX 0955-43-4185

URI： <https://www.town.arita.lg.jp/rekishih/>